９．レポートを作成してみよう(2)　　実践編

これまで「レポートの書き方」の基礎についてお話ししてきましたが、今度は実践編として、実際にレポートを作成していく手順についてお話ししましょう。まず、「死刑制度の存廃について君の意見を述べよ」という課題がでたとします。その際、どのような手順でレポートを作成していくでしょうか。テーマは決まっているので、おおよそ次のような作成の過程をとります。

①資料の収集・文献リストの作成
②知的水準の把握と整理……問題はいくつあるか？
③中心テーマを絞る。
④構成を考える
⑤書く
⑥校正する
⑦寝かせる
⑧推敲する

1　資料の収集

〔１〕インターネットの活用

レポートが課せられたとき、最初におこなうのは資料の収集です。おそらく、多くの皆さんはそれをインターネットの検索から始めますね。インターネットがどういうものであるかは、既に高校時代に学習済みでしょうし、「リエゾン・ナビ――情報を検索して集めてみよう」（第３章６節）でも学ぶので、改めて説明には及ばないでしょう。玉石混淆の中から宝石だけを取りだすスキルを身につけてください。

ただし、「先ずはウィキペディアという人」、「filetype:pdf の意味すら知らない人」、「NACSIS-Webcat も開いたことのない人」は、とりあえず「リエゾン・ナビ第３章６節」をもう一度読み直しましょう。

ここでは参考までに、検索機関名を載せておきます。

（１）公共の図書館・学術機関

大学のホームページ「東北福祉大学」から、「図書館」－「資料を探す」－「サイドメニュー」で検索してください。

・「学内の所蔵を検索する」
・「国内の所蔵を検索する」
・「近隣の図書館を検索する」
・「雑誌記事・学術論文を検索する」

等々各項目ごとに豊富な検索機関が列挙されているだけでなく、そこから、直接に移動できます。また、国内の雑誌記事や、新聞記事など個人で契約すると「有料」な検索も図書館からなら「無料」で検索が可能です。是非利用しましょう。

（２）官公庁

政府刊行物 http://www.gov-book.or.jp

総務省統計局統計センターhttp://www.stat.go.jp/

文部科学省 http://www.mext.go.jp/

厚生労働省 http://www.mhlw.go.jp/

福祉医療機構 http://www.wam.go.jp/

（３）新聞・雑誌

朝日新聞 http://www.asahi.com/

読売新聞 http://www.yomiuri.co.jp/

毎日新聞 http://www.mainichi-msn.co.jp/

日本経済新聞 http://www.nikkei.co.jp/

（４）オンライン書店（現在流通している書籍、古書の検索及び購入）

日本出版協会 http://www.books.or.jp/

アマゾン・ドット・コム http://www.amazon.co.jp

オンライン書店ｂｋ１　http://www.bk1.co.jp

丸善 http://www.maruzen.co.jp/

ジュンク堂書店 http://www.junkudo.co.jp/

紀伊国屋書店 http://www.kinokuniya.co.jp/

八文字屋書店 http://www.hachimonjiya.co.jp/

（５）一般の検索機関

グーグル……http://www.google.co.jp

検索デスク……http://www.searchdesk.com/（検索機関のリンク集）

何でも検索リンク集……http://www.koalanet.ne.jp/~mhs1det/

〔２〕図書館の活用

図書館の活用も「リエゾンゼミⅠ――図書館利用」（リエゾン・ナビ第２章２節）で学ぶので、ここでは、「参考図書」の意味だけ確認しておきます。

図書館には参考図書（レファレンス・ブック）と呼ばれるものがあります。多くは開架式の棚に並んでいます。参考図書とは参考文献という意味ではなく、一般に現段階での常識的な知識水準を示すもの、あるいは文献を探す手引きとなるものを指します。辞典、辞書、事典、人名辞典、地名辞典、便覧、年表、書誌、図鑑、年鑑などがそれです。中規模以上の図書館では「参考閲覧室」として、独立している場合が多いです。

レファレンス・ブックは、知的水準を示すもの＝学界の常識レベルですから、参考文献としてあげないのが普通です[注1)]。

注１）
齋藤孝他『文献を探すための本』（日本エディタースクール出版部、1998/04、第１章）

2　膨大な情報から必要な文献を選ぶスキル――知的水準の把握と整理

例えば、「死刑制度」について書籍の検索をすると、瞬時に 100 件以上の情報が得られます。それらを総て読破できるならばそれに越したことはないでしょうが、現実的ではありません。そこで、その膨大な情報の中から必要な文献を選び出すスキルについてお話ししましょう。

〔１〕１日で知るアウトライン――ネットとレファレンス

まず、一番大切なことは、とりあえず概要を知ることです。最もお手軽なのは、インターネット上の「ウィキペディア」でしょうか。しかし、これは、お手軽そのものですね。「桃太郎ってなんですか？」「桃から生まれた少年が鬼を退治する話です」程度のレベルです。で、もう少しレベルを高めるには「グーグル」等の検索機関から検索語のあとに「filetype:pdf」を付けて、良質な情報（公的文書）に絞って収集することです。書籍で言えばレファレンス・ブックや『日本の論点 2011』（文芸春秋社、2011/01）などに目を通すことでしょうか。『日本の論点』は、毎年更新されるので、過去、数年にわたって調べる必要があります。このような各 30 分程度で読めそうな資料で「死刑制度」のアウトラインをつかみます。

〔２〕10 日間で知るアウトライン――入門書の選定

次に、もう少しレベルを上げて「死刑制度」を概観します。それには、入門書を読むことです。入門書の探し方は、立花隆さんの『ぼくはこんな本を読んできた』を参考にしましょう[注2)]。立花さんは本の購入を勧めています。理由は後から分かります。

注２）
立花隆『ぼくはこんな本を読んできた』（文春文庫 1999/03）

さて、本屋にいったら、まず関係書のならんでいるところにいって、片端から本を見ていく。本のタイトルを全部読んでいけば、だいたいその分野の大づかみな全体像が浮かびあがってくる。次に、その中で入門書的なものを片端から抜き出して、中身を見ていく。

入門書に二種類ある。教科書的入門書と教科書以前の一般向け入門書とである。たいていの分野には、教科書的入門書として定評が確立している本があるものだ。例えば経済学におけるサムエルソンの『経済学』のごときものだ。

すでにそれを知っていれば問題ないが、知らなくても、書店の店頭で片端から本を見ていけば、そういう本は見当がつく。本を見ていく場合、まえがき、あとがき、目次、奥付だけは必ず見なければならない。まえがき、あとがきで、著者がどういう心づもりでそれを書いたかわかるし、訳書の場合には、訳者あとがきで、その本の客観的評価が得られる。たいていの本は、まえがき、あとがきをよく読めば、購入する価値があるかどうかの判定をつけることができる。それに奥付を見れば、定評ある教科書は多くの版を重ねていることからもそれとわかる。（中略）着目すべき点は、参考文献案内と索引がしっかりしているかどうかという点である。初心者には、あまりに浩瀚な文献案内は必要ない。むしろ、紹介している文献が厳選されていて、その一冊一冊について、どういう特色があるか、難易度はどうか、どういう問題についてはどの本が必読文献であるか、といったことが懇切に書かれているもののほうが望ましい。

こうした教科書的入門書を三冊ぐらい選んで買うのがよい。その場合注意しなければならないのは、傾向がちがったものを買い入れることである。特に社会科学系統の分野では、著者の立場によって、同じ問題を扱っても、全く正反対のことが書いてあることも珍しくない。経済学でいえば、マルクス経済学の学者が書いたか、近代経済学の学者が書いたかによって、まるでちがう経済学の世界に導か

れることになる。哲学になるともっとひどい。唯物論、現象学、分析哲学、実存主義などなど、すべて立場がちがう。（中略）その意味でも、入門書はバラエティにとんだ複数のものを手にしたほうがよい。それも、相次いで読んだほうがよい。（中略）

次ぎに、それぞれの立場の古典的入門書に進むというのが順序である。それ以外に、若い学者によって書かれた入門書というのも加えたほうがよいかもしれない[注3)]。

注３）
立花隆『ぼくはこんな本を読んできた』（文春文庫 1999/03、73～5 頁）

ここで、大切なポイントは入門書を３冊と言っているところです。私なりにアレンジして言うなれば、１冊目は諸君がスラスラと読み通せそうな本。２冊目は定評ある教科書的な入門書で、参考文献がきちんと載っている本。できれば索引がついていて欲しい。３冊目は反対の立場の本（死刑制度に賛成な本を選んだなら、廃止派の本）、あるいは系統の違う本。

〔３〕論の絞り込みのために――各論の選定

立花さんはこの後、さらに名著、学史、各論の購入を勧めていますが、卒業論文などの本格的なレポートの時に活用するとして、ここでは「各論の購入」部分だけ抜粋しておきますね。

（１）各論の購入

さて、次に必要なのは、各論的なものを求めることである。これは、その学問の深みを知るために必要だろう。（略）概論では一章どころか一節で片づけられている問題が、それぞれ一巻の書になりうるのである。（略）とりあえず、自分の最も興味がもてそうなテーマで、しかも中を開いてみて、自分の歯が立つ程度の内容のものを一冊求めておく。　（立花隆『同』73～81 頁）

一年生の皆さんは入門書３冊読んだら、その中で特に興味の湧いたものに絞って各論に進みましょう。各論をしっかりと読めば、後は次に何を読むべきか、自然に分かってくるはずです。以上で本の求め方は終わりますが、ついでに、本の読み方について付言しておきます。

3　本の読み方

インテンシブ・リーディング（intensive reading 精読）や、エクステンシブ・リーディング（extensive reading 多読）など、本の読み方にも色々あって、目的によって使い分けられます。詳細は**「読解力を高めよう」（第３章１節）**に譲りますが、「輪廓をつかむための読書法」としてはエクステンシブ・リーディング（extensive reading 多読）をお勧めします。立花隆さんと梅棹忠夫さんの言葉に耳を傾けてください。

〔１〕立花式読書法

（購入した）あとはただひたすら読む。まず軽い概説書を読みとばす。教科書的入門書を読む。一冊読むと、だいたいの輪郭がつかめるから、二冊目からは楽になる。

精読する必要はない。ノートもとらないほうがよい。はじめからそんなに張り切りすぎると、必ず途中で挫折する。ノートを取りながら精読したりすると、二時間で読める本に二日もかけてしまうことになる。一冊の入門書を精読するより、五冊の入門書をとばし読みしたほうがよい。ノートをとらなくても、本当に重要なことはどの本でもくり返されているから自然と頭に入る。ノートを取る代わりにアンダーラインを引いたり、ページを折っておけばよい。あとは索引を頼りにすればよい。本は粗末に扱ったほうが役に立つ。後で古本屋に売るときのためにきれいにしておこうなどとケチなことは考えないほうがよい。

よくよく選んで買ったつもりでも、じっさいに読んでみるとつまらないという本が必ずでて来るものである。できが悪いというだけでなく、どうしても、その著者の考え方についていけないという場合もある。その場合には、せっかく買ったのだからなどとケチなことは考えずに、即座に読むのをやめる。買い込んだ本の二割くらいはそういう本になると覚悟しておいたほうがよい。一冊しか買わない場合には、どうしてももったいない気がして、無理やり読んでやはりつまらなかったと思い、結局、時間と頭の無駄使いに終わるが、いちどきに二〇冊も買い込んでいれば、二冊、三冊途中で読みやめても、どうということはないという気になれる。（立花隆『同』79～80 頁）

〔２〕梅棹式読書法

本は一気に読んだほうが理解という点では確実さが高い。すこしずつ、こつこつ読んだ本は、しばしばまるで内容の理解ができていないことがある。

本をかくということは、書き手の立場から言うと、やはり、一つの世界を構築するという仕事である。そして、本を読むと言うことは、その、著者によって構築された世界の中に、自分自身を没入させるという行為である。それができなければ、本は理解したことにならない。すこしずつ、こつこつ読んだのでは、構築された一つの世界が、鮮明な像を結ばないのである。本は一気に読んだほうがいい。（中略）

昔からいわれている読書技術の一つに、ノートをとれ、ということがある。読み進むにつれて、書き抜きをつくったり、覚書や感想を書いたりせよ、というのである。しかし、私はそういうやり方には賛成でない。すこしずつ、こつこつ読むのを勧めないのと同じ理由からである。いちいちそんなことをしていたら、読むほうがなかなか進まない。それに、どうしても細部にかかずらわってしまって、本全体の見通しがつきにくくなる。ときには、くたびれてしまって、しまいまでゆかないうちにその本を投げ出してしまう、ということにもなりかねない。本は始めから終わりまで読むということを眼目とすれば、こういう挫折しやすい方法はよくない。とにかくも全巻を一ぺん通読することこそ、第一であろう。

もっとも、読んでいるうちに、ここは大切なところだとか、書き抜いておきたいなどと思う箇所にゆきあうことが少なくない。そういうときには、これも昔いわれていることの一つだが、その箇所に、心覚えの傍線を引く方がよい。とりあえずこうして印を付けておいて、書き抜きもノートも、すべて一度全部読み終わってからあと、ということにするのである。私は、２Ｂの鉛筆で、かなり太い線を、黒々と入れる[注4)]。

注４）
梅棹忠夫『知的生産の技術』（岩波新書、1969/07、103～7 頁）

〔３〕立花式　読書訓 14 箇条

最後に、立花隆さんが、ご自身の読書観を箇条書きにしていますのでそれを引用しておきましょう。

（1）金を惜しまず本を買え。
（2）一つのテーマについて必ず類書を何冊か求めよ。
（3）選択の失敗を恐れるな。失敗なしに選択能力は身につかない。
（4）自分の水準に合わないものは、無理して読むな。
（5）読みさしでやめることを決意した本でも、終わりまで一頁ずつ繰ってみよ。意外な発見をすることがある。
（6）速読術を身につけよ。
（7）本を読みながらノートを取るな。どうしてもノートを取りたい時には、本を読み終わってから、ノートを取るためにもう一度読み直したほうが、はるかに時間の経済になる。
（8）人の意見や、ブックガイドのたぐいに惑わされるな。
（9）注釈を読みとばすな。
（10）本を読むときには懐疑心を忘れるな。
（11）オヤ？と思う箇所（いい意味でも、悪い意味でも）があったら、必ず著者がどのようにしてその情報を得たか、あるいは、著者の判断となった根拠を考えよ。
（12）何かに疑いを持ったら、いつでもオリジナル・データ、生のファクトにぶちあたるまで疑いをおしすすめよ。
（13）翻訳は誤訳・悪訳が多い。わからないときは誤訳を疑え。
（14）二〇代、三〇代の時に蓄積していく知識の量と質が、その人のその後の人生に決定的な作用を及ぼす。若いときは何をさしおいても本を読む時間を作れ。　（立花隆『同』83～85 頁）

4　問題点の整理とテーマの絞り込み

入門書を読んだら、必要と思われる文献リストの作成と問題点の整理をして、ザックリとした概観の把握と今後の戦略を練りましょう。コピーした資料等はファイルにまとめます。ノートパソコンにデータとして入力するのもいいですね。文献リストはエクセルを活用するのが便利です。修正したり、追加したりという操作が簡単にできます。

また、本に付けたマークや附箋の箇所をまとめるにはパソコンが便利です。皆さんに貸与されるのはノートパソコンだけですが、この際、**プリンターを是非購入して下さい。**プリンターにはコピーやスキャナー、OCR 機能などの付いたものがあり、これが飛躍的にデータ整理を助けてくれます。

買った本はマークしっぱなしでも事足りますが、図書館の本はそうはいきません。必要な箇所をコピーしたり、スキャナーで取り込んで pdf ファイルに落としたり、あるいは OCR 機能を使ってスキャンしたデーターをワープロ編集（電子文字化）したりするのは、すべて一台のプリンターでできます。プリンターのないパソコンは「箸のない弁当」「紙のないコピー機」のようなものです。

〔１〕木下式　テーマの絞り込み（Brainstorming＋KJ 法）

問題点の整理と論述内容の絞り込みについては、木下是雄氏の『理科系の作文技術』がたいへん参考になりますので、是非読んでみて下さい。理科系の人に限りません。ここでは、『理科系の作文技術』から、第２章「準備作業（立案）」部分を私なりに要約・アレンジして紹介しておきましょう[注5)]。

注５）
木下是雄『理科系の作文技術』（中公新書 1981/09）

（１）準備作業　立案・発想法のヒント

（ａ）何が問題なのか？（死刑制度について、今何が争点となっているのか）

（ｂ）それについて、わかっていることは何か、わからないことは何か？を明らかにする。

（ｃ）わからないことは、解明されていないのか？それとも自分がわかっていないのか？

（ｄ）思いつく事柄を箇条書きにしろ。

（ｅ）似て非なるものを探せ。その違いに本質的な問題がある。

（ｆ）Brainstorming 的な発想法の活用をせよ。

（ｇ）問題となっている論点を整理しろ。

（ｈ）自分の立場を明確にせよ。（死刑制度の存続に賛成なのか、反対なのか）

（ｉ）反対意見を封じる材料を探せ。

木下是雄『同』（第２章）

Brainstorming
くつろいだ会議のかたちでおこなう集団的創造作業。参会者は、問題について頭に浮かぶアイディアを片端から述べる。それが刺激になってまた別のアイディアが出る。途中で批評的発言をしてはいけない。最後に、列挙されたアイディアを検討して、問題の解決法を考える。（木下是雄『理科系の作文技術』中公新書、26 頁）他に、川喜田二郎『発想法』（Ⅲ章「発想をうながすＫＪ法」、中公新書 66～114 頁）

ちょっと解説します。（ｆ）にブレーンストーミングという言葉がでてきますね。アメリカの社長さんが創りだした問題解決のための発想法で、６～７人でやる会議のことですが、レポートの戦略立案に使う場合はそれを一人でやります。「Brainstorming 的な発想法」とは、要は頭に浮かんだアイディアを連想式に次々とメモ書きしていくことだと考えてくだ

さい。死刑制度についてのメモ書きだと、以下のようになるでしょうか。

（２）メモ書きの例

死刑は抑止力になる。死刑は抑止力にならない（『暴力と殺人の国際比較』アーチャー）。興奮して人を殺した時に死刑のことを考えたか。人一人殺して、一二、三年で出所っておかしくないか。日本に終身刑はない。本当の終身刑を作ればいい。生涯収監される囚人に対して、刑務官は処遇に窮するとの反対説。生涯収監囚人は更正意欲を失い人格の破壊を招くとの反対説。死刑執行されるのは、一年に何人くらい？　日本の死刑囚ってどれくらいいるの？　明らかに死刑が誤りだった例はある？　誤審って今までにどれくらいあるの？　絶対許したくない殺人事件の事例は？　死刑を執行する刑務官の苦悩を書いたものはある？　池田小学校の事件はどうなった？　コンクリート殺人の少年は、社会復帰してまた監禁暴行事件を起こした？　被害者の親族は死刑を望む？　望まない例もある。　国連憲章。　菊田幸一『いま、なぜ死刑廃止か』。　死刑判決のばらつき。団藤重光『死刑廃止論』。　日本国憲法３６条に抵触。　憲法１３条は？　オウム事件。　カナダの死刑廃止翌年の殺人発生率は過去十五年で最低。

こんな感じで、次々に考えをメモ書きしたあとに、それをまとめて方向性・ポイントを絞っていきます。その時に KJ 法を活用するとよいでしょう[注6)]。KJ 法は川喜田二郎氏が提唱したまとめかたで、これを使うとゴチャゴチャの考えが見事に整理されます。例えば、KJ 法を使って、死刑制度の問題点をまとめてみると、次のようになります。

（３）死刑制度に於ける現況の知の水準（問題点のまとめ）

①死刑は凶悪事件の抑止力となりうるか、否か。

抑止力となりうる……存置派（アメリカの例）

抑止力たり得ない……廃止派（カナダの例）

②誤審・冤罪の可能性

誤審・冤罪の可能性は少ない……存置派（再審制度、法務大臣決裁）

誤審・冤罪の可能性は必ずある……廃止派（英国ﾃｨﾓｼｰ･ｴｳﾞｧﾝ囚）

注６）
川喜田二郎『発想法』（Ⅲ章「発想をうながすＫＪ法」、中公新書 66～114 頁）

KJ 法
用意するもの：ペン３色。名刺大の紙 200 枚以上。輪ゴム、クリップ。

（方法）
「書く」
ブレーンストーミングで出た意見を 1 枚に 1 要素で書く。例えば「酒は節度をもって、楽しく飲め」という発言は「酒は節度を」「酒は楽しめ」の二つにする。

「並べる」
紙片を並べる→近親間を覚えた紙片同士を重ねて小グループを作る→小グループに 1 行見出しを付ける→近親間を覚えた小グループ同士を重ねる→別色で 1 行見出しを付け中グループをつくる→中グループをまとめて５～10 の大グループをつくる。

「注意」
メモは易しい表現で。頭の中で分類して、束ねるのは×。似た者同士で、束ねる。孤立の紙片は無理に重ねない。→中グループ、大グループで処理される。

③違憲性

日本国憲法に抵触する……廃止派（憲法９条、暴力の否定。11 条、基本的人権）

日本国憲法に抵触しない……存置派（憲法９条戦争の放棄。11 条）

④国際的な潮流

国連の死刑廃止条約に従え……廃止派

国連の死刑廃止条約は文化圏の違い……存置派

⑤世論調査の正当性

世論調査による国民感情に配慮……存置派（1956、1975、1999 の結果を尊重）

世論調査による国民感情は危険……廃止派（凶悪事件直後の世論調査に正当性はない）

⑥遺族感情への配慮

遺族感情に配慮せよ……存置派（遺族の気持ちに配慮すべきだ）

遺族感情に配慮せよ……廃止派（遺族が助命運動す例で反論）

Brainstorming や KJ 法はレポートを書く上で大変有効です。詳細は共通テキスト**「ブレーンストーミングをやってみよう」（第６章２節）**、**「KJ 法をやってみよう」（第６章４節）**に述べられていますが、同じ６章にある、「ロジックツリー」や「フレームワーク」「ゼロベース」なども思考の整理には有効ですので是非活用してください。

〔２〕野口式　テーマの絞り込み（メッセージの吟味）

もう一つ、テーマを絞ってレポート化していく際に必要な思考操作があります。それが、メッセージの検討です。メッセージとはレポートの主張、自分の意見のことです。論文のエッセンスはここにあります。野口悠紀雄氏が『「超」文章法』という著書の中でその重要性を次のように解説しています。

メッセージの重要性について

講義では実際に BS 法と KJ 法やインターネット検索をつかって、レポート（調査報告書）を作成してみてはどうでしょうか。

１限目
「大学生活を充実させる方法」「友達を沢山作る方法」「リエゾンゼミを楽しくする方法」「魅力ある人間になる方法」などなど適宜テーマをきめて、1 グループ５～６人で、20 分くらいのブレーンストーミングをさせます。もう１グループはそれを KJ 法で記録。終わったら、BS と KJ グループを交替して別テーマでやります。

ここまでで、40 分。その後、何人かの代表者を選んで、１人１テーブルで、紙片を広げて KJ 法（紙片のまとめ）をさせ、指導します。残りは各テーブルに数名ずつ参加して一緒に作業する。出来上がったら、紙片の山を見ながら、グループごとに、分析結果を発表。

講義の目的は、KJ 法を使って分析し、その結果をレポートするまでの確認です。

「宿題」＆２時限目
各自、紙片を持ち帰り、自宅で KJ 法をつかって、意見の分析をし、自分の意見もまじえて、レポート（1000 字前後）として提出させます。翌週、発表させ、他の人にコメントを加えさせます。

再度、レポートの書き方について、確認させ、自分のレポートの良かった点、改善すべき点を考えさせます。

後期で正式な BS 法、KJ 法を学ばせていただければ、と考えています。

（ａ）メッセージに主張や発見があるか？

メッセージとは「どうしても読者に伝えたい内容」。論述文では主張や発見にあたる。論述文の成功・失敗の８割はメッセージで決まる。

ｉ）死刑制度は改革しなければならない。

ⅱ）死刑か終身刑かは被害者の遺族に決定させるべきである。

＊ｉ）はメッセージになっていない。主張でもないし、発見でもない。これは、当たり前のことを確認しただけである。ⅱ）の命題はメッセージになっている。これは、個人の発案であり明快な主張だからだ。

（ｂ）メッセージは一言で言えるか？

＊適切なメッセージは一言で言える。簡潔に言えないのは論点がぼけているからである。

（ｃ）そのメッセージは書きたくてたまらないか？盗まれたら怒り狂うか？

＊書くに値するメッセージにはオリジナルなアイディアがある。

（ｄ）ピントは合っているか？

＊「ピントを合わせる」言い換えると、「広すぎるテーマはだめだ」ということ。広すぎるテーマを一定の字数の中で論じようとすれば、どうしても浅く、薄くなってしまう。間口ばかり広くて、深みのない内容になる。

（ｅ）メッセージは為になるか？面白いか？

＊書くに値するメッセージは必ず「タメになる」か「面白い」。「タメになる」とは、有用な情報を含んでいることである。「面白さ」は多くの場合、謎解きや発見の面白さで、好奇心を呼び起こし、満たしてくれるものである。

「宿題」＆３限目
２限目の終わりに、以下の宿題を出します。①グループで、インターネットで「あらたにす」（朝日・日経・読売よみくらべサイト）を検索し、同じテーマについての社説を調べさせます。②自分の意見もまじえて、レポート（1000字前後）として提出させます。
翌週、発表させ、他の人にコメントを加えさせます。

再度、レポートの書き方について、確認させ、自分のレポートの良かった点、改善すべき点を考えさせます。

講義の目的は、多角的な視点を踏まえて書くことにあります。

〔３〕論述の骨組みを作るためのヒント

（ａ）一つは二つ。二つは一つ。善悪や正邪の逆転。従来とは違う二分法。

＊「一つは二つ」とは、一見均質に見えるものが、もっと複雑であることを見出すことだ。つまり、一つと思わ

れてきたものが二つの面をもつことの発見である。
新幹線で簡単に東京から大阪に行けるようになった。しかし、旅の楽しみは失われた。
電子メールが使えるようになって、連絡が簡単になった。しかし、読むべきメールが増えて、メール地獄になった。

「二つは一つ」は「異なると思われているものが、じつは一つの同じ理論で説明できる」ということだ。一見異質に見えるものから共通属性を抽出するのである。外国旅行に行った時に、日本との違いに唖然としたならば、むしろ「日本と同じものはなにか」に絞って観察してみるというような方法のことである。

「善悪や正邪を逆転させる」というのも、しばしば使われる手法である。例えば、正義の名の下に行われるはずの死刑執行が、直接手を下す刑務官にとっては、耐え難い苦悩＝悪となる。

野口悠紀雄『「超」文章法』（第一章、第二章）[注7)]

注7）
野口悠紀雄『「超」文章法』
（中公新書 2002/05）

5　構成

おおよその方向性と書く内容が決まったら、レポートの構成を考えます。序論・本論・結論にそれぞれどういったことを書くか、ポイントを箇条書きにし、本論は章立てして内容を箇条書きし、各章に小タイトルをつけます。全体のバランスをみながら、配列を吟味します。各章を構成するに際して注意すべき点をあげておきます。

〔1〕章を構成する際のポイント

（a）序論・本論・結論の構成が最もオーソドックス。

（b）序論に求められるポイント（以下の条件を総て満たす必要はない）

1．本論の主題となる問題の提示。

2．その問題をなぜ――どんな動機によって――取り上げたか。

3．その問題がなぜ重要か。

4．問題の背景はどんなものか。

5．どういう手段でその問題をせめようとするのか。

６．現在の知的水準は示されているか。

（ｃ）本論に求められるポイント

１．出典・典拠は示されているか。

２．論理的・説得的な展開がなされているか。

３．現行の常識的水準（学術論文の場合は学界の共通認識・知識水準）は踏まえられているか。

４．新たな独自の視点が示されているか（学術論文では必須）。

５．多角的な視点で論述されているか。

（ｅ）結論に求められるポイント

１．本論の主なポイントを簡明に列挙してまとめられているか。

２．それらの重要性を強調し、また将来の発展への道を示唆しているか。

6　書く・校正する・寝かせる

〔１〕ワープロの活用

大学のレポートは長文なので、「読みやすいこと」が前提となります。400 字詰の原稿用紙で 10 枚、20 枚という指定はごく普通です。１枚清書するのに何分かかりますか？　大判の原稿用紙の場合、平均的なスピードは、１時間に４枚、急いで６枚です。例えば 20 枚の指定だと、５時間かかりますね（ぶっ続けで書くなど無理な話ですが）。書いてみたら枚数オーバーしていたとか、誤字・脱字をみつけたとか、文章がおかしかったなどということは、よくあることです。再び書き直すのでしょうか。

そんなとき、ワープロ（パソコン）書きはきわめて便利です。いくらでも対応できます。そもそも、下書きの必要すらありません。とにかく「書く」、それから「直す」、「後でへつる」、「ごっそり入れ替える」、などお手のものです。最初は書いた方が速いかも知れませんが、ちょっと慣れてくれば断然ワープロ書きの方が速くなります。是非大学生のうちに習得しましょう。社会人には必修です。

〔２〕校正する

「ワード」を使用した場合は「校正」の機能が付いてますので、それを活用しましょう。単純な誤字・脱字・などは「校正」機能だけでも十

分に対応してくれます。

〔３〕寝かせる、そして再び推敲する

（１）推敲する

書き上げたら、何度も推敲しましょう。推敲するとは、音読して「つっかえた」箇所を直すことです。すらすら音読できる文章は、読みやすい、素直な、よい文章です。悪文とは「音読しにくい文章」のことで、「一文の長い」のが特徴です。文章は、短く切りましょう。それでも、わかりにくい場合は、修飾の順序を入れ替えることです。これで、だいたい「つっかえる」ところは、なくなるはずです。

（２）寝かせる

「つっかえる」ところなくなったら、一度寝かせます。「寝かせる」とはほったらかして、しばらく読まない状態をつくることです。書いた内容がすっかりと忘却の彼方へ連れ去られるまで、捨て置きます。普通、１週間から 10 日くらいを要します。

（３）再び、推敲する

推敲というのは、回数を重ねるにつれて効果が薄れていきます。なぜならば、回数を重ねれば重ねるほどに文章をまる覚えして、違和感を感じるアンテナが摩耗していくからです。

文章の細部を忘れ、アンテナがとぎすまされた頃に、再び音読して推敲しましょう。２～３回推敲したら、提出しましょう。

①資料はファイルする。
・項目ごとに異なったファイルにすると便利。
②文献リストをつくる。
・エクセルが推奨。
③傍線部をまとめる。
・スキャナーで取り込む。
・pdf ファイルにする。　・OCR で電子文字化する。